



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	Development of the mining industry in Congo : The copper industry in Katanga, 1906-2012 [an abstract of dissertation and a summary of dissertation review]
Author(s)	KALENGA, NGOY JOHN
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(経済学)
Dissertation Number	甲第11642号
Issue Date	2015-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/59371
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	KALENGA_NGOY_JOHN_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（経済学）

氏名：KALENGA NGOY JOHN

審査委員	主査	准教授	高 井 哲 彦
	副査	特任教授	宮 本 謙 介
	副査	准教授	樋 渡 雅 人
	副査	教授	Greitjie VERHOEF (ヨハネスブルグ大学)

学位論文題名

Development of the mining industry in Congo:
The copper industry in Katanga, 1906-2012
(コンゴにおける鉱山業の発展：
カタンガにおける銅産業、1906-2012 年)

本論文は、コンゴ銅産業の半世紀の経済経営史を多角的に分析したものである。

第 1 部は、二次文献を中心としてコンゴ鉱山業史を概観する。

第 1 章は、ベルギー植民地時代、独立期のモブツ政権ザイール、第 1 次コンゴ戦争とカビラ政権、第 2 次コンゴ戦争等の激動の歴史が紹介される。ベルギー時代の植民地収入を支えた国策会社 UMHK(Union Minière du Haut Katanga)社は、独立後、独占的鉱山企業 Gecamines 社に継承される。本論文は 3 回のコンゴ現地調査に基づき、とくに Gecamines 社の年報を主要史料とする。

第 2 章は、コンゴの鉱物資源を概観する。コンゴは、銅(埋蔵量世界 4 位)、コバルト(1 位)、工業ダイヤモンド(同 1 位)、リチウム(5 位)、鉛・銀(10 位)、金(11 位)等の鉱物資源に恵まれるが故に、植民化・内乱の「資源の呪い」を受けてきた。

第 3 章は、ベルギー植民地時代から独立時代までにコンゴの銅資源の所有権を巡る論争を、制度史的にたどる。

第 2 部は、コンゴの鉱山業を実証分析する。

第 4 章は、1967-2012 年の銅・コバルト・鉛の産出量と価格を時系列分析する。銅産出量は、独立後も維持されたが、内乱のため 1990 年代半ばからの 10 年にゼロに近づき、2000 年代半ばに価格とともに回復する。とくにコバルトの産出量も急回復する。

第 5 章は、Gecamines 社や Sodimico 社の企業史を分析する。前者は投資・インフラ上で重要な意味を持った。とくにベルギー期 UMHK 社から独立期 Gecamines 社への移行直後、1975 年頃に減少するベルギー人管理職と増加するコンゴ人管理職が逆転し、コンゴ人労働者も 1990 年頃までは増加する。加えて 1969 年には日本鉱業出資の SODIMICO も設立される。

第 6 章は、1957-2009 年の鉱山事故数を分析した。事故数は、1960 年代から急増するが、1970 年代半ばを堺に急減する。産出量・労働者数がピークの 1980 年代に事故数が急減する背景に安全対策があった。

第 7 章は、2012 年の河川水中の鉱物含有量を元に、2000 年代以降の銅産業の急回復の環境への負荷を分析する。銅産業の急回復は、ニッケルやとくにカドミウムの水質汚染を伴っていた。

本論文の学問的な貢献は 3 つある。

第 1 に、3 回のコンゴ現地調査により Gecamines 社営業報告書等の 1 次資料を収集した。独立後の現代分析には、従来の植民期分析が用いた帝国本国資料に頼れないが、史料散逸や治安悪化に悩むアフリカ現地で資料を発掘した。

第 2 に、植民地期・独立期・戦争期・回復期の 50 年強の鉱物産出量・価格、人種別管理職数・労働者数、事故数等を時系列分析した。従来の政治史では、独立や独裁、戦争により断絶や危機が強調されたが、産出量、管理職・労働者数は独立直後も成長し、事故も一時的悪化の後、改善したことが明らかになった。

第 3 に、第 3 章の政治史、第 4 章の経済史、第 5 章の企業史、第 6 章の事故史、第 7 章の環境論と、コンゴ銅産業を多面的に分析した。第 6 章はサステナビリティ学教育研究センター、第 7 章は獣医学研究科毒性学研究室との学際的な研究教育連携の賜物である。

日本鉱業がコンゴに設立した鉱業会社の幹部親族として鉱山団地で育ち、文部科学省奨学生として北大に留学して以来、その研究成果は国際的に評価されてきた。2011 年の第 4 回サステナビリティ学生研究ポスターコンテストでは総長賞を受賞し、2012 年のザンビアと 2013 年のガーナでの国際アフリカ毒性学シンポジウムでも報告を 2 回行い、現地調査も実現した。北大国際本部、グローバル・ヒストリー学会、社会経済史学会の競争的資金援助にも採択され、2014 年のグローバル・ヒストリー学会欧州大会(パリ)や 2015 年の世界経済史学会(京都)にも学会報告の機会を得た。博士論文審査には、アフリカ経営史の世界的権威である国際経済史学会会長・ヨハネスブルグ大学教授も加わった。発表論文のうち、JJVR はインパクトファクターを持つ国際雑誌で、上述の毒性学シンポジウムの成果でもある。

博士論文には生硬さも残るが、その多面的・学際的分析を理論的に統合すれば、さらなる成長と成果が望まれる。日本経営史とアフリカ経営史の結節点として、母国帰国後にはコンゴ初の経済史教員になることが期待される。

審査員は、以上のように審査した結果、本論文は博士学位に相応しいと、満場一致で合意した。